

「終戦から

シベリア抑留初期の回顧」

鳥取県 黒見峰雄

終戦前夜

昭和二十年八月九日ソ連軍の不法進攻を知ったが、所属部隊は速成の混成旅団で、一個大隊はわずか二百名程度、砲と名のつくものは一門もなく、九九式小銃さえ全員に行き渡らないありさまで、到底交戦できるような戦力ではなかった。

チチハルへの転進を企図して駅に集結したが列車は運行されず、幸い負傷者も出なかったものの、機銃掃射を受けて、止むなく引き返すことになった。何日か経って、前線からかすかに大砲の余韻が聞こえるようになると、無手勝流の状態では、みすみす砲弾の餌食になるか、自決するか、ソ連の不法な仕打ちを恨む一方で、終局近しと思ひ知らされる心境だった。

このような状況の中で、八月十五日の終戦の玉音放送を知ったのであるが、無念の敗戦に暫時は声もなく、やがて先行きを案ずる心の動揺から隊内は騒然となった。

「敵に軽率妄動を慎み、別命あるまで待機せよ」という今井大隊長の指示があったが、何をなすすべもなく、悲観的な憶測のうちに二三日が過ぎた。夜半から轟々という音と地響きが続き、夜明けになって外を見ると、砲口を兵舎に向けた戦車群が柵の外周を取り巻いており、何とも不気味な雰囲気で、いよいよ来るものが来たという思いであった。

それから数日間の出来事

帰営していない哨戒分隊に終戦を伝達するため、戦車部隊の少佐と自動小銃を持った兵隊の運転するアメリカ製の小型ジープで回ることになった。我々は急造の頼りない通訳と二人だけで、戦車や砲兵部隊のうす汚れた兵隊たちと一緒に、少し酸っぱい、初めて口にする黒パンと、毛の生えたブツ切りの豚肉と馬鈴薯のスープで食事をするのは、野戦料理とはいえ、気持ち

のよいものではなかった。

伝達を終えて間もなく、今度は兵器引き渡し の責任者として立ち会うことになった。持ち込まれた小銃弾を箱に詰める手作業であるが、時間がかかるのを見かねたソ連兵が、シャベルですくって投げ入れて、このようにしろと急ぎ立てる。何とも危ない限りで、とても真似のできるのではなく、無神経なのか無知なのか、全く肝を冷やしたことである。あらかた八月も終わるころ、ソ連軍の祝賀会があり、将校を一人参加させるよう大隊長のところへ使者が来た。現役で若いということで、この時もまた私に出席の命令があった。敵軍の祝宴に恥をさらしに行くのはもとより心外で気も進まなかったが、いたし方なかった。

十数名のソ連軍将校監視の中で、日本人は私と通訳の二人だけである。無事に帰してくれるかどうかという一抹の不安もあったが、戦争中に捕虜になったわけではないし、何も恐れることはないと自分自身に言い聞かせ、弱気になってはいけなさと平静につとめた。

終戦の伝達に同行した少佐が隣に来て紹介すると、

険しい連中の目付きも若干和らいだように見えた。ウォッカでの乾杯で喉が焼け、胃袋がひっくり返るほど強烈だったことを今でも鮮明に覚えている。

このころになると、自動小銃を構えたソ連兵の腕時計、万年筆の強奪におびえる毎日であったが、一方で「ヤポンスキー、スコーラ東京ダモイ」のソ連兵の声が聞かれるようになった。

しかし、大隊長の見解は真反対で、極度に労働力の不足しているソ連が日本に送還するはずはない。シベリアに抑留して労働を強制するだろうから、極寒に備えて移動するまでに防寒服を確保せよとのことであった。残念ながらこの予想は的中した。酷寒零下五十度の労働に、この防寒服がどれだけ役立ったことか、大隊長の先見に感謝したものである。

九月初旬、「ダモイ トーキョウ」というふれこみで、千名単位の大隊を編成し、旬日におよぶ難行苦行の野宿の末、目的地の黒河に到着してみると、たくさんの先着部隊が駐屯していた。

聞けば対岸のブラゴエシチュンスクへ渡る順番待ち

とのこと、この時ダモイではなくシベリア抑留を確
認したのである。

入ソから翌春四月まで

九月に入ソすると、シベリア鉄道の沿線にある農場
で、馬鈴薯の収穫作業をしながら逐次西方へ移動して
行った。ブラゴエンチェンスクとチタの中間にあるス
コポロジノの収容所に入ったのは十月の中ごろだった
と思う。

スコポロジノは、満州黒河省漢河の黒龍江対岸から
密林を北へ約百キロ、シベリア鉄道の駅や機関庫、病
院などのある街である。

収容所といっても、屋根も窓も床も大修理を要する
古い兵舎である。休む間もなく次々と外の作業が始
まった。鉄道沿線の掃除、建物基礎の穴掘り、薪用の
伐採であった。しかし、日増しにつる寒さと粗末で
わずかな食糧では、みるみる体力の消耗で、十二月下
旬には犠牲者が始まった。一月に入り、朝の外気温が
零下五十度になると毎日死亡者があり、一日に数名を
数えることもあった。

一方死亡者を埋葬する穴掘りが大変な作業で、外部
の作業に出ない虚弱者の分担であるためなおさら苦痛
である。凍った土は石やコンクリートより固く、つる
はしでも跡がつかないほどである。近くの森から枯枝
を集め、長方形に積み上げ、たき火をしては少しずつ
掘り下げる繰り返しで、警備兵の言う一メートルまで
掘るのに深夜におよぶこともあった。

初めのうちは襦袢袴下を着せ、上下に狐を置いて埋
葬していたが、被服は貴重品であるから脱がせよとい
う収容所長命令で、涙ながらに揮一本で凍土を被せる
ことになった。もとより墓標にする板などはないので、
太い枝の片側の皮をはいで名前を記して建てたりした
が、今では跡形もないことであろう。

死亡者が増加しだすと、死因を調べるという口実で
解剖が始まったが、調書を残す目的ではなく、軍医だ
という将校たちの実習だったようである。

もとの部隊から死者が出ると交代で立会いすること
となり、暖房のない凍るような部屋で、ゆらぐローソ
クの灯の下での解剖は、身も心も凍るような鬼気迫る

ものがあつた。

三月から四月と亡くなる者は少なくなってきたが、地表が解け始める五月までに、実に千名の一割を越す百数名が倒れていったのである。

春が来ると作業にもなれ、虚弱者も減少したこともあつて、ほとんど死亡者も出なかつたが、入ソから八か月間は、飢餓と極寒の戦いで生死をわける生き地獄そのものであつた。

幸せにも今日生あるを思うとき、故国生還を夢みながら無念の死を遂げ、酷寒のシベリアの凍土の地下で、裸で眠っている同胞たちが痛ましい。ただただ靈安らかれとご冥福をお祈りするばかりである。

非人道的、屈辱の被抑留に堪えて

広島県 原 修 三

山田 今日遠路をおいで頂き、ごくろう様です。

これから時間を約三十分位の聞きとりをさせて頂きます。

す。

先ず 軍歴を簡単に、

原 昭和十年徴集で、昭和十一年一月、歩四十一に入隊、翌八月一日宇品港出發、釜山經由で日中事變に参戦、昭和十三年一月一日南京入城、上海を経て二月十二日青島上陸、同年十二月ハイラル到着、昭和十九年八月関東軍直轄機動第三連隊に編入され終戦になりました。

山田 で、終戦当時の状況を、更に特に印象に残るものがありましたら。

原 丁度私は昭和二十年八月、曹長教育の為、駐屯地の公主嶺を離れていて、八月九日ソ連の進攻があり、八月十二日原隊に帰着しましたが、主力は既に出陣しており、早速追及のため軍司令部に到着、その時点で終戦の気配を感じました。中隊に到着の時点では、既にソ連軍の支配下にありました。連隊長の若松中佐は古武士の風格を備えた人で、相当熟慮されたようですが、遂に筆銃で自決されました。場所は東満の延吉

(關東) でした。